

# 福祉系 対人援助職養成の 現場から

③

## 西川 友理

### 学歴差別

夕方、携帯電話に学生から電話が入りました。「せんせ～悔しい～」といきなりの泣き声。

——どうした、どうした。

この学生は専門学校生。某機関での社会福祉士相談援助実習の3日目が終了した帰り道、なんでも実習先職員の発言・行動に許せない所があるらしいのです。

「この事業の勉強は大学でやった？あ、やってないの。じゃあ専門学校でもやってないわね」

「〇〇大学のAさんにとって難しい課題なら、あなたにも難しいわね」

と、たまたま実習期間が重なった大学生を何かにつけて基準にし、“専門学校生には出

来ない”と決め付けられるとの事でした。

「…でも、私が知っている知識や、出来る課題も沢山あるんです。多分私の方があの大学生よりも知識があると思う。でも、『知ってる？わかる？』って聞いてもらえへんねんもん！」

——うん、そうか。

——うん、そうか。

「それは悔しいねえ。なんにも落ち度がないのに、下に見られている感じ？」

「そう！大学か、専門学校かってだけで、まず差をつけられてる感じ！私、ちゃんと勉強してきたし、事前の用意もしたのに！」

「うん。ちゃんと勉強して、用意して、頑張ってたよね」

「そうだよ。なんで福祉の人間が学校で差別すんねん！信じられへんわ！」

——うん。そうか。

## 学歴差別をぶっ飛ばせ！

「納得いかんよな。…でもな、世の中に差別はあるよ。あって当たり前と思う。私もな、『何が差別で、何が区別か』まだわからへんけど。例えば、アメリカ人なら陽気で明るいだろう…とか、九州男児なら男らしいだろう…とか、江戸っ子なら気っ風がいいだろう…とか、これって差別か？」

「…差別っていうか、それは、そういうもん、みたいな…。文化的特色やないですか？」

「うん。当事者以外が言う文化的特色って、ある種勝手な思い込みイメージなんちゃうかなあと思う時がある。ソーシャルワークをする時にも、そういう事って時々ないか？ ケース事例を読んだ時、出身地や出身校、職業などを見た時に広がるイメージってあるやろ？」

「あっ、あります！」

「それと差別と何がどう違うの。舞台上立つヴィジュアル系バンドの長髪のボーカルが『本職は寺の住職なんだよねえ』と言った時に『おおう?!』と思うなんていうのも、その人の見た目と、自分の持つ“坊主”のイメージとのギャップに、びっくりするからやないの？」

「うーん」

「大事なんは、そういうイメージを持たれているという状況で、自分はどうか、ですよ」

「……」

「誰でも、初対面の時にイメージや思い込みを持って当たり前。でもその後の付き合いの中で、様々なことが見えてきて、初めて

その人の持つ能力や特色がきちんと理解できる。理解される」

「はい」

「あなたは今、実習が始まったばかり。その大学生よりも勉強してきていない。知識が乏しい。あまり賢くない。…と思われている。で、その状況であなたはどうするよ？」

「…頑張る。見直させたる。負けてないと思う」

「うん。私もそう思う。よし、じゃあ頑張れ」

後日、実習巡回指導に行くと、彼女は明るく話をしてくれました。積極的に質問し、実習指導担当者に話をするようにしたら、徐々に自分を見る周囲の目が変わり、とても高度な話をしてくださるようになったり、議論が出来るようになったとの事。件の大学生からも「あなたと話してたら、自分が勉強足りてないって良くわかるわ…」と言われたとの事でした。

## さりとて、学歴差別

果たしてこれでいいのか。

“学歴差別はある、あるという前提で、あなたがその差別を変えていきなさい”という指導は、その時点で学生を励ますためには良いけれど、無駄にしんどい思いをさせているだけなのではないのか、そこまで世間の風当たりが強くなくても良いのではないのか、と思うのです。

専門学校生の社会的評価は、大学生のそれと比べて、かなり低いように感じられます。例えば、実習の受け入れをお願いした際、「専門学校ですか？いまどきの専門学校生って、別にその専門の勉強をしたくて入

学したわけじゃないでしょ？大学に入る頭が無いけど、働くのも嫌だから、とりあえず専門学校に入学した子じゃないの？そんな子は実習に来てもらっても、困るんですよ」と、直接言われたこともあります。確かにおっしゃられるような学生も中にはいます。でも、「専門学校生」というだけで、どうしてそれ程までの全面否定に至るのか、あまりの言葉にその時は呆気にとられてしまいました。

過去に、専門学校からの実習生を受け入れた事で、何らかのかたちで苦しめられたことでもおありなのでしょうか。

## 学歴偏重主義 “大学神話”

実習受け入れ施設・機関の実習指導担当者は、概ね30～50代の方々です。35歳と仮定した場合、その方々が18歳の時は1993年、あの“ジュリアナ東京”が話題になった年です。この年、初めて大学・短大への進学率が40%台をマークしました。それ以前で30%を超えたのは1973年。この年に18歳だった人は、現在55歳の方々です。実習指導担当者の方々が学生の当時、大学受験は“勉強しなければ合格しない”ものでしたし、大学に進学出来る人は、18歳人口の中でも少数派でした。だからこそ、大学に合格した人は、能力が高く、努力をしてきた者として、周囲から認識されていたのでしょう。

少子化の影響もあり、大学全入時代と大きく報道されたのが2009年。その実、2000年頃からは、AO入試が一般的になってきたこともあり、経済的な問題がなく、大学・学部を選び好みさえしなければ、進学でき

る時代。いくつかの大学は必ずしも死に物狂いで勉強して入学する所とは言えない状況です。

大学・短大への進学率は、2005年度に50%を超え、2010年度には56.8%になっています。

大学生の中でも、志望した大学に入学し、社会福祉士相談援助実習に向けて真っ当に努力する学生もいれば、とりあえず大学に入学し、なんとなく実習に出向く学生もいます。

同じく、専門学校生にも、福祉職に就くために必死に頑張っている学生もいれば、なんとなくこの学校に入学しました、という学生もいます。

大学に進学することが容易くなってきたこの時代に“大学生は勉強が出来て、努力家が多い。専門学校生は勉強が出来ず、テキトーな奴が多い”という考え方は、いみじくも、学生が泣きながら訴えていた「なんで福祉の人間が学校で差別すんねん！」という状況なのではないでしょうか。

## 学歴偏重主義を超えて

専門学校は「専門職を養成する」ための学校。学生は学校が設定したカリキュラムに基づいて、最も適した時期に、必要と考えられる科目を受講しています。よって、専門学校生は、実習で必要とされる、一定の知識や技術を教育された状態で実習に臨んでいます。

大学は「学問する」ための場。学生は自分が必要と考える科目を、自分で選び履修します。よって、実習前には、学生個々の

履修状況が異なり、知識や技術の習得度にばらつきが生じています。実際は多くの大学が、社会福祉士の受験資格取得を希望する学生に対し、「この科目は〇年次に履修する事」と、最低限、履修すべき科目のガイドラインを提示しています。

実習前に必要な科目に関して、専門学校生は系統立てて学習するが、大学生は習得状況にばらつきがある。このように比較してみると、大学から受け入れた実習生の方が、専門学校から受け入れた実習生よりも「能力が高く、勉強してきている」とは言いきれないと思います。

いくつかの大学・専門学校で学生を指導してきましたが、実習指導内容をどの程度理解出来、専門知識をどのように活用出来るのかといった点は、結局の所、学生個々の能力によって差が出てきます。だからこそ、それぞれの学校に対するイメージに囚われず、“学生一人ひとりをよく見て、個々に見合った指導を行う事が、よりよい福祉人材を育てる事となる”と思うのです。

願わくば、福祉に携わる者として、実習先、実習指導担当者の方々も、同じような思いで受け入れた実習生（学生）達をご指導いただければ、大変嬉しく思います。

参考資料：

文部科学省『平成21年度学校基本調査』